

単に感情を表出する発話

駒谷和範 名古屋大学大学院工学研究科

妻の実家で日曜を過ごす時、お昼どきにはテレビでNHKのど自慢が流れており、それを見ながら昼食をいただくことがよくありました。この番組の最後には、合格の鐘を得た出場者の中からその週のチャンピオンが発表されます。ある週のチャンピオンは20歳前後の若い男性でした。選ばれたことにたいそう驚いたようで、「感想は?」「一言お願いします。」というアナウンサーの問いかけに対しても「マジやばい・・・」と絶句したように繰り返すだけでした。その後話は続かず、間の悪い感じでアナウンサーは次の話題に移っていました。

デジタル大辞林によると、「やばい」の意味として「危険や不都合な状況が予測されるさま。あぶない。」とあります。もちろんこの若者は、何かがとても危険であることを伝えようとしたわけではなく、自分がとても感動していることを表明していたのでしょう。(実際、同辞書には補説として「若者は『最高である』『すごくいい』の意にも使う。」とあります。)しかしアナウンサーの問いかけに対する応答として、表現がいわゆる若者言葉である点を除いても、違和感を覚えました。つまり、問いかけに対する応答として、「マジやばい」が成り立っていないという違和感です。

現状の音声対話システムでは、各発話は何らかの情報を相手に伝えようとする行為として捉えられます。つまり、質問に対してはその回答を応答に含め、また確認に対しては肯定もしくは否定を行います。しかしこの「マジやばい」は、単に自分が強い感情や印象を持っていることを表明するだけで、何かの新たな情報を伝えるわけではありません。これに似た例として、若い女性は何に対しても「かわいい」と言う現象も挙げられます。

このような発話は音声対話システムではどのような扱いになるのでしょうか。音声対話システムの研究は従来、米国でのATIS (Air Traffic Information System) を始めとするタスク遂行型対話を中心に進められてきました。例えばこのATISでは、飛行機の予約をタスクとして、予約に必要な情報(出発地、到着地、航空会社など)をシステムに伝え、予約を完了させることを目的とします。システムの性能としては、意味理解率(音声認識結果をもとにタスク達成に必要な情報を正しく得られた率)やタスク達成率が高く、またタスク達成までのターン数が少ない対話が良いとされてきました。したがって「マジやばい」のように、タスク達成に貢献しない(新情報を含まない)発話はそもそも扱う対象外です。(このような対象外の発話に対して誤動作しないことも音声対話シ

テムでは依然重要な課題のひとつです。)

一方で、タスク遂行を目的としない対話(通称雑談対話)の研究も近年行われています。「ヒューマノイドロボットにとりあえず話をさせたい」というような場合の対話はこちらに属します。このような対話では、何をもちょう良い対話とみなすかという指標に未だ定まったものはありません。少なくとも、タスク遂行型対話のようにターン数が少ないこと、つまり対話が早く終わる方が良いということはなさそうです。また雑談をしようというユーザの目的(動機)を満たすものである必要もあります。まずは対話を成立させるために、ユーザの発話に対してシステムが関連する発話を生成できることは必要条件であり、Webなどの対象分野のテキストから類似する部分を検索し、それを応答として用いる研究はあります。しかし雑談中で、何らかの対象に対して「マジやばい」「かわいい」のような発話を相手が行った場合、関連する新情報を提供する(つまり話題を遷移させる)のは不適当であるように思えます。

私の主観では、対話での「マジやばい」のように単に感情を表出する発話は通常、①前提となる対象を共有しているような親しい相手に対して、②相手と感情を共有したいという動機で、行われるものだと思います。またそれを聞いた側も、基本的には③適切なタイミングでそれに同調するのでしょう。つまり、発話の内容を伝えることが目的ではなく(むしろ対象は既に共有されているはずで)、発話を行うこと自体が目的であると言えます。もし冒頭の場面が親しい場での対話であった場合、アナウンサーも「マジやばいねー」などと同意したかもしれません。しかしやはりお昼の全国放送ではそうもいかなかったようです。

このように「事実(新情報)を伝える発話」以外にも、「感情の共有を求める発話」を扱えることが、雑談型対話システムでは必要になりそうです。また、発話の内容というより、発話を行うことそのものに意味のある状況もありそうです。さらにその発話を、どのようなタイミングで行うかも重要な要素となりそうです。音声認識や音声合成などの要素技術の性能が向上してきた昨今、要素技術からのボトムアップなアプローチだけではなく、音声対話全体としての総合的な設計・構築の研究を始められる状況になりつつあります。このような観点からの研究も必要であると感じています。